

改革派聖餐論の特色 ——カルヴァンからウェストミンスター信仰基準へ——

坂井純人

はじめに：改革派の聖餐論の眼目〈問題意識〉

本稿の目的は、改革派教会の伝統的聖餐理解を明らかにすることである。しかし、一口に改革派聖餐論と言っても、そこには多様な伝統と類型が歴史的に織り合わされて存在する事実がある¹。改革派伝統の主要な代表者には、カルヴァンが挙げられるが、彼の聖餐理解にも発展と変遷、深まりがあることが、近

¹ P.ヤコブスは、多くの改革主義信条の配列の特色として、聖礼典の教理が教会秩序との密接な連関で述べられていることに注目し、両者の関係を、「教会秩序は信仰告白に属し、聖礼典からその場を受け取り、また聖礼典の執行は、教会秩序を必要とするということである。聖礼典の純粋な使用は教会秩序への問を包含する」と要約している。ここに、教会を教会たらしめる見えるしるしとしての御言葉の正しい宣教、聖礼典の正しい執行に加えて、教会秩序という信仰告白事項との関連が述べられる。ヤコブス、『改革主義信条の神学』（新教出版社、1981年）、161頁。

聖礼典は、御言葉と教会秩序との関係にあって、キリストのからだを建て上げる重要な意義を持つ。この視点から、特に聖餐におけるキリストとの交わり、現臨理解も改革派教会の特色ある教理となる。カトリックの実体変化説やルター派の共在説とも異なり、さらに、単なる記念説とも違う、聖霊によるキリストの現臨理解は、信仰者による実質、しるしが意味し、保証する聖餐の内容の受領へと導く。これは聖餐の主催者であり、与えられる恵みの内容の付与者であられるキリストとそのからだである、信仰者たちとの結合という関係理解をも表明するものである。ここに、聖餐理解と教会形成との間の生命的関係が生み出される。

年の研究により知られている。例えば、ヴィム・ヤンセは、カルヴァンの聖餐論の発展について、1536年から1537年にかけては、「ツヴィングリ化」の傾向を示す特徴がみられ、1537年から1548年の間には、「ルター化」への傾向が見られる、と指摘している。さらに、ツヴィングリの後継者、ハインリヒ・プリンガーとの交渉の結果を反映する「チューリヒ一致信条」や、1559年版の「キリスト教綱要」では、ルター派からの論敵となったヨアヒム・ヴェストファルとの論争の結果が反映され、逆に1560年から1562年には、再び、ルター派との和解を目指す方向性を示す、とされる²。同様の指摘は、セルダーホイスによってもなされているが³、マラーは、初期カルヴァンの聖餐理解については、単純化の方向を避けつつ、ツヴィングリ、メランヒトン、ルターの真理契機に通底する多様性の萌芽を持ったカルヴァン像を描いている⁴。

このような研究成果から、カルヴァンの聖餐理解のモチーフは、神の主権と超越性を強調する視点や逆にキリストの肉と血に与るというキリストとの結合のリアリティーを語る激しさを共に、含むと言い得るであろう。前者の視点からは、ツヴィングリのように、聖餐の品々における物素へのキリストの内在を否定し、キリストの死の記念と捉える、象徴的、記念説への契機が提示される。この場合、ローマ・カトリック的な実体変化説やルター派的な所謂、「共在説」には否定的になる。しかし、逆に、「ルター化」への傾向と言う場合には、実際に、そこに臨在されるキリストのからだと血によって信仰者が養われる霊的現実を表現することになる。この場合にも、ルター派とは異なり、信者でない者が、聖餐の実質に与ることは否定されるが、強調点は、そこに臨在、内在されるキリストに信仰者が霊的に養われる恵みを提示する点にある。その意味では、単なる象徴説や記念説では説明できないキリストにある現実の信仰的養いが強調されることになる。無論、そこでも真実に、キリストのからだと血によって

² ヴィム・ヤンセ「カルヴァンの聖餐論」、『新たな一歩を』（キリスト新聞社、2009年）92頁

³ Herman J. Scelderhuis ed., *The Calvin Handbook* (WM.B. Eerdmans Publishing Co., 2009) p.345.

⁴ Richard A. Muller, "From Zurich or Wittenberg? An Examination of Calvin's Early Eucharistic Thought" *Calvin Theological Journal* 45 (2010) pp.243-255.

信仰者が実質的に養われると言う場合の肉と血の理解は、キリストの肉体の場所的現臨と受領の形式を巡って、ルター派とは、異なる理解を持つことになる⁵。

カルヴァン自身は、実体変化説を批判するのみならず、単なる記念説、共在説にも批判的であった。しかし、同時に、各々の真理契機に敏感であったのは、聖餐論こそ、宗教改革プロテスタント陣営において、一致を目指すのに、もっとも解決困難な課題の一つであると見なしつつ、同時に、プロテスタント内部での一致を図る最重要課題の一つと考えたからであろう。カルヴァンは、ツヴィングリやルターの真理契機をさらに神学的に精緻な神学的表現で表そうとした。この意味で、プロテスタントのかなり広い範囲において、その聖餐理解が、通用する射程を持つと言えるであろう。ここにプロテスタント陣営において、カルヴァンの聖餐論を研究する意義もある、と言える。しかし、歴史的現実的には、宗教改革当時、教会的一致の課題実現は困難であった。歴史的検証をしてみると、カルヴァン自身の理解に発展がある事実と相当程度にカルヴァンに独特な表現が見られる点とは、この複雑な事情を反映している、と推察する。

しかし、この独自性と改革派諸信条との共通理解と異同の確認を通して、改革派教会全体としての聖餐理解の特色を浮かび上がらせることは可能である。というのは、カルヴァン個人の思想にのみ思想的源流を独占的に遡らせるのではなく、改革派教会全体の諸信条の中に、その特質を見出すことが、信仰告白的教会としての改革派的姿勢の特色の一つでもあるからである。本稿では、改革派伝統の形成に特に影響力を持つカルヴァンと英米を中心に長老派教会に影響を持つウェストミンスター信仰基準の聖餐理解を比較しつつ、その前後、

⁵ カルヴァンは、キリストの肉体と我々の肉体との人間本性における同一性を聖餐理解においても強調する。キリストのこの肉体の実質から命を注がれる結合において、我々は、永遠の命に養われるのである。これは、十字架の後に復活し、昇天、着座された栄光化されたキリストにおいても二つの本性（神性と人性）における完全な人理解は貫徹されることになる。すなわち、場所的、肉体的現臨という存在の在り方をしないキリストによって養われる逆説を、カルヴァンは、真の肉体を持つ我々の救いと見たのである。同じ人間本性を持つキリストが栄光化され、天上におられるからこそ、我々は、天上の生が保証され、さらに、今生の生においてもキリストとの結合を通して、聖霊がもたらして下さる永遠の命に信仰を通して養われるのである。赤木善光、『宗教改革の聖餐論』（教文館、2005年）、463-466頁を参照。

周辺の類型との関係を考察することに課題を限定する。その検証過程の中で、聖餐理解における改革派伝統の多様性と一致する部分が明らかにされるであろう。

まず、聖餐とは何か、と言う主題について、幾つもの重要な神学的課題があるが、本稿では、聖餐におけるキリストの臨在、現臨の理解に関心を集中する。何故なら、この問題こそが、カトリック、プロテスタント諸派を巡って、キリストとの結合という救済論上の最も重要な局面を礼典的表現で表す神学的特色となるからである。これは、カルヴァンが、キリスト者の生活において、キリストとの結合ないし、キリストとの交わりを最重要視した事実と相俟って、礼典理解の生命的課題の一つであった。

I : カルヴァンの聖餐理解の特色

①<キリストとの結合の重要性>

カルヴァンの信仰と神学にとり、生命的に重要であったのは、まず、キリストとの結合である。これは、救済論上だけでなく、彼の教会論の要となる。カルヴァンは「キリスト教綱要」第3巻において、次のように述べる。

もし、あなた自身を思い見るならば、断罪は確実である。けれども、キリストはその一切の恵みにあなたを与らせて、彼のもつ全てはあなたのものとなり、あなたはかれのえだとなり、こうして、あなたはかれと一つになる。それゆえに、かれの義はあなたの罪を圧倒し、かれの救いはあなたの断罪を滅ぼし、かれはその尊さをもって、あなたがふさわしくないままに神の御前にあらわれることがないように介入したもうのである⁶。

ここでは、キリストと一つにされることと救いの確かさが一体的に把握されている。

⁶ カルヴァン、『キリスト教綱要』(1559年版)3巻2章24節、(新教出版社、1963年、渡辺信夫訳)53頁

次に、教会論を語る「綱要」第4巻では、このことは、御霊の働きの内に、聖晩餐の出来事を次のように説明する。

すなわち、御霊が空間的にへだてられていることどもを、正真正銘、一つに結び合わせたもう、ということがそれである。さて、キリストは、御自身のいのちを、あたかも、骨と髄とに入り込む、と言ってよいほどに、われわれに移し注ぎたもう、その肉と血との伝達を、聖晩餐において証しし、また証印したもうのである⁷。

これは、「御霊の効力」によって成就するキリストと彼の民の結合である。さらに、この恵みは、真の信仰と心の底からの感謝をもって受け入れる信仰者だけが、この益にあずかる、とされる⁸。ここにキリストとの結合という救済論上の生命的事柄が語られると共に、この結合を可能ならしめるのはひとえに神の御霊の働きであり、この生命的一体性を味わう重要な場が、聖晩餐なのである。この聖晩餐における恵みの受領者は信仰を通してキリストと結合された民である。故に、カルヴァンにとり、キリストとの結合を中心に展開する聖餐の教理は、救済論と教会論とを結ぶ急所ともなるべき重要課題であった。このようにして、キリストとの結合がもたらす霊的現実と恵みは、真の神の契約の民を生み出す。

このように重要な聖餐の教理であるが、カルヴァンによれば、礼典自体が、キリストとの結合を生み出すのではない。むしろ、キリストによって、すでに与えられている結合を御言葉と礼典が強化するのである。では、御言葉と礼典との関係はどうか。これは、御言葉が優先し、礼典のしるしと約束を保証する。さらに、御言葉によって礼典にふさわしく与る信仰も与えられる。この礼典において、第一に、キリストと我々が一つにされるため、第二に、キリストの全ての恵みにあずかるものとなるために、聖餐の奥義においてキリストは差し出されるのである⁹。そして、キリストとの結合はすでに信じる者には与えられて

⁷ カルヴァン、上掲書 4巻第17章10節、88頁

⁸ 上掲書、第4巻第17章5節、83頁

⁹ 上掲書、第4巻第17章11節、90頁

いても、更にこの恵みに招かれるのは、我々の弱さの故である。聖礼典は根本的に、御言葉と礼典なくしては、さまよいやすい弱い我々の信仰の養いのために与えられているのである¹⁰。

②<キリストの臨在の在り方>

キリストの恵みの受領の際に、問題になるのが、キリストの礼典における臨在の理解である。カルヴァンは、カトリック的実体変化説、すなわち、キリストの肉体の物理的現臨は激しく否定する。キリストの取られた肉体は、我々と同じ、完全な人性を持っており、それは復活、昇天、着座以後も栄光化された状態においても、天的性質を持ちつつ、地上に同時に存在することはしない。むしろ、神的位格と一つに結合されたキリストの人性は、聖霊において、信仰を通して、信仰者と共に現臨される。神性と分かち難いお一人のキリストの人性は、このようにして、天にありながらもキリストと我々との霊的結合を通して、礼典において、我々を霊的に養われるのである。これは、ルター及びルター派の所謂、共在説とも異なり、礼典の物素とそれを通して受け取るキリストの実質とを区別した議論である。にもかかわらず、キリストのからだと血を表すしるしは、聖霊によって効力あるものとされ、具体的に信仰者自身を養う。しるしと事柄は、ここに礼典的一致を見せる。しかし、聖霊により信仰を通して、注がれる礼典の実質とキリストの実質も区別されつつ、我々を養うのである¹¹。カルヴァンが、我々は主の晩餐においてキリストのからだと血を飲食するのである、と表現する時、そこでは常に、「霊的な仕方であることが強調される。霊的な仕方、とは、信仰者も不信仰者も共に、キリストのからだと血に与るという客観的な可能性を意味しない。ルター派では、信仰者は命に養われ、不信仰者は、この飲食によってさばきを招くが、客観的には、両者共に、そこにいますキリストのからだと血を飲食する事になる¹²。カルヴァンは、礼

典において用いられる物素を直接的にキリストのからだと血であると解さないばかりか、執行された礼典の事柄自体もキリストのからだの実質とは区別する。キリストのからだは天にあるのである。しかし、礼典におけるキリストのからだと血の飲食の意味が主張される限り、この意味が追求されなければならない。彼にとり、礼典の実質は、キリストである。しかし、ルターとの比較において、キリストの肉体の性質は、我々と同じ肉体であり、遍在はしない。栄光化されているが、しかし、天にも地上にも同時にあるからだではない。聖霊によって、神性と人性を分かちがたく持つ、キリストとの神秘的結合が主の晩餐において、信仰を持つ受領者との間で起こる。そして、我々、キリスト者は、天にあるキリストの実質から、真実に、信仰を通して注がれる恵みによって養われるのである¹³。

II：改革派教会の聖餐理解におけるキリストの臨在の理解

A：<カルヴァンと同時代人の理解>

①ツヴィングリ（1584-1531）

次にカルヴァンの理解が同時代人の改革派神学者らとどのように関わっているかを考察してみる。まず、スイス宗教改革の先駆者であり、チューリヒの宗教改革指導者、フルドリヒ・ツヴィングリの理解に注目する。従来、ツヴィングリの所謂、象徴説とカルヴァンのキリストの現臨説が対比されるからである。両者は、復活、昇天、着座以後のキリストの肉体が、地上的には不在である点においては一致した。しかし、聖餐において起こる出来事についての理解は相違している。ツヴィングリの聖餐理解については、「キリスト教信仰の解明」（1531年）における『聖餐におけるキリストのからだの臨在について』を資料

1982年、859-862頁、

¹³ 『キリスト教綱要』（1559年版）第4巻第17章11節、89頁では、この実質は、第一に「意味」、第二に「主題ないし内容」、第三に上記二者から由来する「力」、「あるいは「効力」と語られている。意味は約束であり、内容は十字架の死と復活を伴うキリスト、効力とは、贖い、義、聖、永遠の命、ならびに、キリストが我々に授けたもう他のあらゆる恵み、である。

¹⁰ カルヴァン、『キリスト教綱要』（1536年版）（教文館、2000年）151-153頁

¹¹ 上掲書、185頁、ここで、カルヴァンは明確に「 sacramentにおいて与えられるのは、彼のからだの実体自体ではなく、キリストの真の本性的体でもなく、キリストがその体をもって私たちに与えたもうた全ての恩恵である」と述べている。

¹² 「和協信条」、根本宣言第7条、『ルーテル教会信条集』<一致信条書>、聖文舎、